

ハ・ジンの小説とその中国語訳をめぐる問題

——グローバル化の中の中国文学——

宮尾正樹

文化大革命後の改革開放路線の中で、中国文学は市場化、商品経済化の波にもまれ、大きな変化を経験し、九〇年代に入ってからいつそうその速度を速めている。「人文精神の危機」というような言い方で、知識人の中から拝金主義、実利主義の横行に対する危機感が表明されたが、汪暉が指摘するように、彼らの「啓蒙主義」は毛時代の中国に対する批判としては強力であったが、「資本主義市場と近代化過程自体がもたらした社会危機」に対しては無力であった^①。さらに九〇年代末には、経済のグローバル化の中で、国民国家的烙印をもつとも強く押されていると言つてよい文学は創作において、また批評においてそれと向き合うことを余儀なくされている。中国におけるグローバル化の議論には一般的に楽観的な気分が見られるようだが^②、少なくとも文学批評における議論にはそのような雰囲気は希薄であるように思われる。最近『文学評論』等の雑誌には「全球化」をテーマとした文章が多数掲載されている^③。中国においては（他のアジア地域と同様に）近代文学の出發から「世界化」が課題とされてきたのであるが、情報の空間的・時間的距離がますます小さくなった状況の中で、西洋のオリジナルに対する自らのコピー性がますます露わになっていることに対する焦燥感がそれらの端々に見てとれるように思われる。それはグローバル対ローカルの二項対立において、ローカル／ネイティブを選び取ることでそのアイデンティティ

が回復されるような簡単なものではない。⁵⁾

そうした状況下で、「中国文学」を中国国外で活動する中国系作家を視野に入れての再定義を試みる動きがある。台湾文学やシンガポールやマレーシアの中国語文学（馬華文学）への関心は七〇年代からあつたが、最近の議論の特徴は、それを中国文学の異種あるいは支流としてではなく、それを含めたトータルな形で中国文学そのものの領域を再考しようとする点、及び、中国という国家的かつ民族的枠を自明のものとして前提しないことにあると言えよう。

こうした議論には内から外に向かうものと、外から内に向かうものの二つの方向性があるように感じられる。前者は、一九九九年に開かれた「世界華文文学国際学会」における議論に端的に見られる。同学会は一九八二年に「台港文学学会」として発足し、その後「台港澳暨海外華文文学学会」へと対象領域を広げてきたものである。⁶⁾ 同学会における発言は必ずしも一様ではないが、中国文化がいかにして世界の周縁から中心に復帰することができるとか、⁷⁾ 「世界華文文学」を大陸、台湾香港を「本部」とし、馬華文学、北米の華人作家、その他地域というヒエラルキーでとらえるなど、⁸⁾ 「世界化」が「中華」の拡張によって達成されるという見取り図は概ね共有されているように思われる。中国や中国系の人々の社会、歴史、生活を外国人が描いたもの（『大地』『中国の赤い星』など）の中国語訳もその内に含まれるべきだと多様性を主張するものもあるが、⁹⁾ 「我々はイギリス人の器量を学ぶべきである」と述べているように、そのイメージするところのものは、世界経済におけるアメリカ中心主義、そして情報流通における英語の独占状況との、また文学におけるその対応物としての英語文学との二重のアナロジーである。

一方、海外在住の中国系作家による中国語以外の言語の著作が増え、高行健のノーベル文学賞受賞に象徴され

るように、国外で高い評価を受けていることも、中国文学の境界を問い直す契機となっている。「今天」は昨年「西洋語で著作する作家特集」を組んだが、その序論で、趙毅衡は中国文学とは文化的意味における「中国」の文学であり、論理的に中国語文学（中文文学）であると信じてきたが、それが今挑戦を受けていると述べている。¹⁰ 趙は中国系作家を「遺伝子レベル」（外国語の環境で育った、自分自身は中国生活の体験を持たない）の民族性を持つ「華裔作家」（マキシン・ホン・キングストン、エイミ・タンなど）と、「経験レベル」の民族性を持つ「新移民作家」（ティモシー・モー、ハ・ジンなど）に分け、両者の文化素養、西洋読書界における扱われ方、他のマイノリティ作家との関係、中国との文化的紐帯のあり方などにおける相違を挙げつつ、共にその民族的特殊性によって西洋社会に受け入れられ、「普遍」に足を踏み入れようとしたとたんに障害にぶつかることを指摘している。中国文学が中国語文学であるという見方を保持はするが、中国におけるモダニティが中外文化の融合を特徴とする以上、異国の言語で書かれた「中国生活気質」（題材だけでなく、文化経験総体）を描いた文学が中国文学の閉塞を打ち破る力になるだろうとした上で、趙自身は極論であるとして斥けるが、「二十世紀に中国語文学が二十世紀の達成以上のものを成し遂げることはきわめて困難であろうが、中国人が海外で行う英語による創作については楽観している」という夏志清の予測を引用している。

本稿では、最近日本語訳も出版された「新移民作家」の一人、ハ・ジンの作品のアメリカと中国語圏における受け止められ方を検討することで、文学が国家、文化、言語を超えるというのがどういうことかを考える手がかりとしたい。ハ・ジンの作品の具体的分析については、稿を改めて行うこととしたい。

ハ・ジンの略歴は以下のごとくである。¹³ 一九五六年に遼寧省で生まれ、七〇年から五年間、人民解放軍の瀋陽

軍区に従軍する。復員後ハルピンの鉄道局に勤めた後、七八年に黒龍江大学英文科に入学、八二年には山東大学大学院に進む。八五年アメリカに渡り、ボストンのブランドイス大学に入学する。八九年の六四事件の際、天安門広場の模様をテレビ映像を通して目にし、アメリカに留まる決心をする。九二年にアメリカ文学の学位を取得し、九三年以降はアトランタのエモリー大学で英語と創作を教えている。創作を始めたのはアメリカに渡ってからで、仕事が見つからず、生活のために投稿を繰り返し、不採用になって返却されては書き直し再び投稿するという日々が続いた。大学で教職についた後も同様であった。最初に出版された著作は詩集二冊である。九六年に出版された最初の小説集 *Ocean of Words* が PEN / ヘミングウェイ賞を受賞する。続いて二作目の *Under the Red Flag* はフラナリー・オコナー賞を受賞。長編小説 *Waiting* が一九九九年の PEN / フォークナー賞、二〇〇〇年の全米図書賞を相次いで受賞した。PEN / ヘミングウェイ賞は処女作を対象に選考される賞、全米図書賞はアメリカで最も権威があるとされる賞、PEN / フォークナー賞は最も賞金が高額の賞であり、まさにシンデレラ的成功を収めたと言えることができる。

アメリカの読書界でハ・ジンの名が広く知られるようになったのは、*Waiting* が全米図書賞を受賞して後のことである。目下のところ、代表作は *Waiting* ということになるだろう。この作品は一九六〇年代後半から八〇年代前半にかけて、東北地方の解放軍病院に勤務する軍医、Lin Kong (中国語訳、日本語訳ともに孔林、以下漢字で表記) が同じ病院に勤める看護婦の Manna Wu (同じく呉曼娜) と結婚するために、親の決めた妻と離婚しようとするが、さまざまな障害のために、離婚が成立するまで実に十八年を要するという物語である。

この作品がアメリカで大きな文学賞を受賞すると、中国のメディアも比較的大きく取り上げ、中国語訳が北京の出版社から出される運びとなっていた。

ところが、六月一四日に『光明日報』の「中華読書報」に劉意青という女性の「誠実と引き替えの商売」という文章が載り、風向きが変わった。⁽¹⁵⁾

劉はシカゴ近郊の大学で開かれたハ・ジンの朗読会を聞きに行った。期待に反して、ハ・ジンの朗読は蚊の鳴くような声でなまりも強かったが、それよりも劉が驚いたのは、「小説の言語の低劣さと粗雑さ」であった。朗読されたのは、国慶節のパーティで酒を飲みすぎたヒロインの曼娜が主人公の孔林に性交渉を迫る場面だったが、同行したアメリカ学者が中国の女性はアメリカ人よりもずっと開放的だと揶揄し、劉は作品から「安手の恋愛小説から拾い集めたゴミの臭い」を嗅ぎ取った。その後、新聞雑誌にハ・ジンを賞賛する文章が目につくようになった。劉は一例として『シカゴ・トリビューン』紙の読書欄（一九九九年十月三二日）を挙げる。そこには *Waiting* の紹介の文章と並んで纏足女性の足が描かれ、さらに、辮髪が大きく印刷された原書の表紙の写真が掲載されていた。それらから劉が読み取ったのは、アメリカ人はこの作品の言語が美しいからでも、技巧が一流だからでもなく、「中国の落後と中国人の愚昧」が描かれているがゆえに気に入ったのだということであった。

この投書が一つのきっかけとなって、中国側の出版社がアメリカの出版社に契約の取り消しを伝え出版は頓挫した。その後、この翻訳は台湾の時報出版社から九月に出版された。

劉は、ハ・ジンが賞を獲得するために支払った代償はあまりに大きく、自らの親や同胞を嘲ることを余儀なくされ、アメリカのメディアが中国を「醜化」する道具の役割を果たすこととなったと批判する。高行健や鄭義など海外に出た作家だけでなく、賈平凹の『廢都』に対する批判の際などにも使われたおなじみのレットテルである。劉にすれば、ハ・ジンの創作上の設定のリアリテイのなさは意図的なものであり、彼はアメリカ人の中国に対する偏見におもねり、それを強化するようなものを書いたのであった。その例として、劉は主人公の孔林が親の命

令で結婚する相手の Shuyu (淑玉) が纏足の女性であるという設定を挙げる。

六〇年代に大学を卒業した軍医が、いくら故郷が農村だとはいえ、自分より年下の纏足女性と結婚するはずがない。私自身六〇年代初めに大学を卒業した女性だが、私の母親の世代(生きていけば八、九十歳になる)でも纏足した女性はきわめて少なかった。ハ・ジンがこのような筋立てを設定したのは、中国が遅れていて、結婚の自由がないというテーマを強調するために他ならない。

この設定にどの程度のリアリティがあるか筆者には判断がつきかねるが、ありえないこととしりぞけることもできない。作家自身は従軍中に聞いた話が下敷きになっていると書いているが、このディテールがそれに含まれるのかどうかはわからない。坂元ひろ子は、一九三〇年代にいたっても三分の二の女性が纏足していたといわれており、抗日戦争時期から内戦、さらに社会主義化を経て、五〇年代にいたってようやく廃絶されたと指摘し、次のように述べている。

八〇年代初頭に中国に留学した私自身、地方の有名な寺廟に行くたびに、山道を苦勞して登る参拝客の老婦人に小足の痕跡を目にし、奇異な感じを抱いたものだった。⁽¹⁶⁾

また、淑玉のケースが決して典型的な女性として提示されているのではないことは作品に明示されている。彼女も孔林と曼娜の二人とは別の意味で人々の好奇心と軽蔑に満ちた、そしていつそう露骨な眼差しにさらされているのである。作品の冒頭で、孔林がはじめて淑玉を見た時の様子が描かれているが、彼の目には彼女は老女のようであった。「今は新中国なのに！纏足をした娘など誰がありがたがるものか。」と十センチしかない足をした女性を前にして彼は心の中で叫ぶ。また、結婚以来二十年にわたって、一度も職場の病院を訪れることを許されなかった彼女が、別居が十八年間に達すれば自動的に離婚できるという病院の内規を利用して離婚するために、故

郷の農村ではなく病院のある町で離婚訴訟を行うことになり、初めて病院を訪れた場面では、

病院では、看護婦も医者も職員も、そしてその妻たちも、淑玉が纏足の足でよちよち歩く姿を見て目を見張った。七十過ぎの婆さんならまだしも。淑玉はいつも一人で歩いてきた。林は他人の前で彼女と一緒に姿を見せようとは決してしなかった。病棟の前の広場を横切るとき、若い看護婦たちはいつも窓際に集まって彼女を眺めた。纏足の女性は普通腿が太くて、お尻が大きいと聞いていたが、淑玉の足は細く、お尻もほとんどないようだった。

「新中国」において、彼女は絶滅したはずの野生動物のように見つめられるのである。

そもそも、劉の苛立ちはこの世代の女性が纏足をしているはずはないというところにあるのだろうか。坂元ひる子は二〇世紀初頭の博覧会に纏足女性が「展示」されることに対する中国人の抗議の内に、被抑圧民族の屈辱とともに、それが「家醜不可外揚」というタブーを犯すものだったからだという点も考慮すべきだと述べているが、「醜化」という言葉には、現実を歪めて醜く描くというよりも、まさに家の恥を外にさらすというニュアンスが感じられるのだ。

さらに劉は、*Waiting* の表紙の辮髪の写真も批判する。

(シカゴ・トリビューン紙面の) 纏足がたしかに小説に描かれているとして、この男性の辮髪と六〇年代の物語と何の関係があるのだ。受賞した時に壇上で光栄であると同時に恐縮していますと演説したハ・ジンに問いたい。この自分の小説の表紙にむりやりかぶせられた辮髪を見ても光栄に感じるのかと。

この表紙のデザインは Michaela Sullivan によるものだ。サリバンは賞をいくつもとっているデザイナーのようであるアンチー・ミンの新作 *Becoming Madame Mao* の装丁も担当している。サリバンがどのような意図でこのような

デザインをしたか、著者のハ・ジンがそれをどう感じたかはわからないが、辮髪を支配あるいは抑圧に対する服従の象徴ととらえれば、この作品のテーマには似合っていると言える。さらに興味深いと思われるのは、中国語訳の表紙は原書とは違い、ヨーロッパかアメリカ東海岸の町（遠景はピントをずらしてあるので特定はできないが）のカフェのような場所で、椅子の背もたれにソフト帽がかけられた写真になっていることだ。英語の原書の表紙が辮髪、中国語訳が西洋の帽子という、ともにそれぞれにとって他者の表象がされている。孔林は故郷の村でも、職場の病院でも、主流からは外れた他者的存在である。封建的な慣習や人民中国の官僚主義に翻弄され続ける点に焦点を当てたのが辮髪であり、村でも病院でもきわめて少数派に属するインテリ¹⁹で、外国文学を読むような「洋」の部分に着目すればソフト帽となる。辮髪が徹底的な服従を意味し、それを拒むには生存をかけた選択が迫られるのに対し、帽子は簡単に取替えが可能であり、いつそうアイデンティティの不在を印象づける。さらにハ・ジンのような移民作家の存在の曖昧さもそれは示しているように思われる。

以上、劉意青の批判の揚げ足をとるようなことを述べてきたが、実は、筆者は劉の批判の狭量な国粹主義的調子には強い嫌悪を感じるものの、彼女が *Waiting* に対して抱く違和感には共感を感じるのだ。

Waiting はアメリカの書評では概ね以下の二点で高く評価されている。一つは、現代中国（毛時代の中国）をリアルに描き出したこと。例えば、Francine Prose はチェホフの「犬を連れた夫人」を引き合いに出して、それが十九世紀のヤルタを映し出したように、きわめて少ない文字数できわめて豊かに二〇世紀中国を映し出したと評価する²⁰。また、Gregory Feely はこの作品がメロドラマ的な筋書きや奇をてらった語りを避けて、一九六三年から八〇年代半ばまでのできごとを「それが実際に生きられたように」くつきりと描き出したと評価している²¹。ではその「中国」とは何か、それをもっとも露骨に示すのは Irene Wanner の次のような批評だろう。

彼の作品は彼の祖国の文化をフィクションの洞察力をもって明らかにしている。彼の小説は、ニュースメディアで見られるように巨大で強力な共産主義中国ではなく、政府が個人の仕事や、住む場所、誰と住むかにいたるまで決定する国家に暮らす欲求不満の恋愛カップルに焦点をすえている。(略)

アメリカ人にとって、この小説は瞠目的である。物語は二〇年間近くにわたるが、タイトルが示すとおり、全ての登場人物はわなにとらわれたように、受身で待ち続ける。このことは中国市民が自由に自由がないかを明らかにするのである。⁽²²⁾

このような読者を対象にハ・ジンは創作するのである。彼自身インタビューに答えて、読者として想像するのは、「英米文学の教育を受けた文学的素養のあるインテリ」であると述べている。⁽²³⁾

それに比べれば、劉が槍玉に挙げたシカゴ・トリビューンの書評は、著者の Wen Huang が中国系であるからである。冷静な見方を忘れていない。

彼は二重の文化背景を利用して、ネイティブな中国人には陳腐に映るかもしれないが、アメリカ人には新鮮な物語を書いた。彼は文化的な豊かさと普遍的な魅力に満ちた登場人物を作り上げる。それは西洋の読者が容易に共感できるものだ。⁽²⁴⁾

およそ「芸術家」としての小説家には似つかわしくない「生活のため」という創作動機の質問に対する答えは、文化的言語的背景を異にする読者を相手に書くための戦略を物語っているとも言えよう。彼は彼らに「合わせる」のである。劉意青の表現を使えば「おもねる」のである。だが、それは自分の信念を曲げて取り入るのは違う。史書美はアンチ・ミンの『レッドアザレア』について、「ブルジョア自由主義や資本主義者の人間主義のペースペクティブからすれば、アンチ・ミンはその語りを通して、アメリカ人の価値に対して大げさに「そうだね！」

と言っている²⁵」と評しているが、これは基本的に、ハ・ジンの小説についてもあてはまることであろう。劉意青がアメリカに媚びを売っているように読み取ったのもその限りにおいては的外れではないが、「アメリカ人の価値」は既にハ・ジン自身の価値でもある、少なくとも彼の側からすればそうである。ホワンが言う「共感」のしやすさも、社会や歴史的背景についての巧妙な説明の仕方についてであつて、制度と人間との関係や、自然な感情の発露としての恋愛（があるべきだ）などに関する価値観はハ・ジンにおいては（アンチ・ミンやおそらくホワンも）共有されているのだ。そしてその価値観に照らせば、人民中国はもつとも人間的に自然な恋愛さえ許さぬ閉塞的な社会ということになる（しかし、作品からは、この二人はまさにそのような社会であるが故に恋愛関係を結ぶように追い込まれていくようにも見えるのだが）。中国の社会制度が抑圧的なものであるということには、「そうだね！」と同感したいが、その社会に生活し、恋をしている人間にとつてそのような決めつけは我慢のならない暴力的なものであるだろう。だが、ハ・ジンは言うだろう。「あなたたちのために書いてるんじゃない。」

右に引いたのと同じ論文で、史書美は『ニューヨークの北京人』を取り上げて、グローバル資本主義の脅威への対抗手段としてのナショナリスト家父長制の再構築がなされていると指摘している。そこではアメリカの資本主義システムが非人間的であり、中国の共産主義システムが「孝と愛の空間」として表象されるという。ハ・ジンの作品に見られるのはちょうど逆の構図である。さらに史は、台湾出身の映画監督、李安が、家父長的登場人物（中国系）の男性性を奪い、アメリカの「ジェンダー政治」との矛盾を巧妙に回避することで、「グローバルな多文化主義のなかにナショナルな構築物をマイノリティ化」することで、アメリカの主流文化に脅威を感じさせずに受け入れられることに成功したと論を進める。ハ・ジンの作品は異国の中国を舞台にしているので、そもそもその矛盾からは自由であるといつてよいが、今後は中国の題材から離れて、アメリカの中国移民社会をテーマ

にした作品を書いていきたいと述べている。⁽²⁶⁾ その際には、恐らく何らかの戦略を立てることを余儀なくされるの
だろう。

二つ目はその文体である。英語を母語としない筆者にとっては、ハ・ジンの文体はわかりやすいが、どこか稚
拙なもののように思われる。むしろ金亮訳の中国語版の文体の方がこなれている印象を受ける。だがアメリカの
書評では文体の美しさを賞賛する評者が多い。例えば、フィーリーはハ・ジンの文体を「明晰」で「率直」だと
評しているし、⁽²⁷⁾「美しく詩的だ」という読者の声もある。⁽²⁸⁾ フィーリーは「ハ・ジンの文体は、彼がまず中国語で台
詞を考えているような印象を与える。だから時に、非常に忠実な翻訳のように感じるときがある」と、彼の英語
の背後に母語である中国語があることを感じ取っている。黄燦然はこの点について、いくつか例を挙げて説明し
ている。want to smile and weep at the same time という英語としてはイディオマチックでない表現が使われるが、
これは中国語の「哭笑不得」を英語に直したものである。「彼は陳腐な中国語を神奇的英語にする。」⁽²⁹⁾ 彼は中国語
を「直訳」することによって、英語に新しい表現をもたらしたということになる。場所によっては「文字通りの
翻訳ではなく、イディオマチックな表現が欲しい」と思うところもあるとフィーリーは述べてはいるが。全ての○
○語なまりのピジンのな文体が英語の豊饒化につながるわけではない。黄はハ・ジンを優れた「直訳者」と呼ん
だ上で、こうした直訳をする勇氣と胆力は、彼自身の（英語の）詩言語の訓練と詩人の言語的感覚によるものだ
ろうと述べる。しかし、英語を母語としない者が書いた英語がよい英語か否かを決定する権力は当然ながら英語
社会の方にある。史書美は「翻訳可能性は、マイノリティとされた者たちが中心に接近して認められようとする
ために必要なモードである」とし、李安の成功は「ローカルでナショナルな文化が、ローカルではない聴衆にとつ
ての解読可能性を備えている」という見込みのもとに可能となったのだが、『いつか晴れた日に』における監督に

対する評価の低さに見られるように、戦略としての翻訳可能性が保障されるのはそれが主流の脅威にならない場合においてのみであると述べている。それを強引に敷衍して言えば、ハ・ジンの英語がその中国語的文体のゆえに評価されるとしたら、それは永遠に周縁的な位置に固定されることを意味しないだろうか。

こう見てくると、趙毅衡のように楽観的な見方に賛同するのはためらわれてくる。ハ・ジンのように英語で中国を描く作家が、主流文化の中で「然るべき」位置を与えられるとき、それはナショナルな中国文学とともに、「文化中国」の文学を構成していくのだろうか。それとも英語文学の中のマイノリティとして、エキゾチックな驚きを提供し続けていくのだろうか。筆者にはどうも後者のように思えてならない。

(1) 汪暉「グローバル化のなかの中国の自己変革をめざして」『世界』一九九八年十月〜十二月。

(2) 二〇〇〇年一月一日の朝日新聞社説「『全球』時代を生きる」は次のように述べている。「『グローバルゼーション』は、中国語では『全球化』という。英語のこの言葉には市場経済がもたらす負の側面もつきまとう。ところが、『全球化』には地球全体が一つ、というニュアンスが感じられる。困難な問題も『全球』で知恵を出し合えば何とかかなるのではないか、理性と解決の意思さえあれば道筋はつくのでは、とそんな気がしてくる。」

(3) 一九九九年から二〇〇〇年にかけての『文学評論』の関連する論文は以下の通り。

孫紹振「西洋文学理論の受容と中国文学經典の解読」一九九九年五期。

楊義「文学研究が二十一世紀に踏み入る」二〇〇〇年一期。

「世紀の転換点における問題意識と人文的関心」二〇〇〇年一期。

昌切「エスニックアイデンティティの焦燥と中国語文学の欲求の背理」二〇〇〇年一期。

許子東「憂国情緒を体現する『歴史反省』」二〇〇〇年三期。

高小康「文化衝突と文学の『喧騒』」二〇〇〇年五期。

劉納「グローバル化の背景と文学」二〇〇〇年五期。

胡明「経済のグローバル化と文学のモダニティ」二〇〇〇年五期。

王寧「東西の対話と開放的構築に向かう文学理論」二〇〇〇年六期。

- (4) 例えば、注(3)の内の、劉納「グローバル化の背景と文学」は、二十世紀中国の作家の西洋の模倣を通じた創造の試みが、読者と批評者とそのオリジナルを見ることのない状況下では創造と「誤解」されたが、八〇年代後期から九〇年代にかけて、こうした「模倣が創造と誤解される」可能性が小さくなり、中国作家の落伍感をいっそう切実なものとしている、と述べている。また、昌切「エスニックアイデンティティの焦燥と中国語文学の欲求の背理」は、中国における「ポスト〇〇論」(原文、後学)が西洋の理論の東洋における一支流にすぎず、自分自身の言説を作り上げることができないと述べ、さらに、西洋文化と自分たちの関係が、文化革新の福音であると同時に、自らのネイティブな文化の惰性を意識せざるを得ないようにまとわりつくものであるとしている。

(5) レイ・チョウ『ディアスポラの知識人』青土社、一九九九、等を参照。

(6) 『二十一世紀に向かって歩む世界華文文学』(一九九九、中国社会科学出版社)はその報告集である。

(7) 黎湘萍「周縁から中心への復帰」『二十一世紀に向かって歩む世界華文文学』

(8) 陳映真「世界華文文学の展望」『二十一世紀に向かって歩む世界華文文学』

(9) 杜元明「華文文学のネイティブイズム、ローカリティ、グローバリティ試論」『二十一世紀に向かって歩む世界華文文学』

(10) 『今天』二〇〇〇年第三期。

(11) 趙毅衡「倉頡の子孫たち」『今天』二〇〇〇年三期。「新移民文学」については、吳奕錡「身分を探して——『新移民文学』を論ず」(『文学評論』二〇〇〇年六期)が次のように定義している。

新移民は、創作主体であれ、表現される客体であれ、時間と空間、文化と物理双方の意味で二重の身分を持った「移民」である。二十世紀七〇年代末から八〇年代初以来、(留学、就労、貿易、投資などの)さまざまな目的で、中国大陸から国外に移り住んだ人々が、中国語を表現手段として創作した、国外に居住する期間の生活の状況や心理などを描いた文学作品が新移民文学である。

- (12) 他に、留学等で海外に出た中国人が異国での生活を描いた作品も大量に産み出されている。『中国留学生文学大系』全六巻(上海文艺出版社、二〇〇〇) 収録の作品、及び各巻の序文参照。
- (13) ハ・ジンの経歴は、堅妮「受賞した中国人」『今天』二〇〇〇年三期、同「死亡との賭け」(ハ・ジンとのインタビュー)『今天』二〇〇〇年三期、などによる。なお、ハ・ジンの原綴は *Han Jin*、中国語では哈金と表記される。カタカナ表記は土屋京子訳『待ち暮らし』早川書房、二〇〇一年、に従った。訳者後記にこの表記を選択した理由が書かれている。ハ・ジンの著作(単行本のみ)は以下の通り。
- Between Sciences* (1990) / *Facing Shadows* (1996) / 以上詩集
- Ocean of Words* (1996) / *Under the Red Flag* (1997) / *The Bridegroom* (2000) / 以上短編小説集
- In the Pond* (1998) / *Waiting* (1999) / 以上長編小説
- 中国語訳は、いずれも台湾の時報出版社から、『等待』(*Waiting* 二〇〇〇年九月)と『光天化日』(*Under the Red Flag* 二〇〇一年二月)が出版されている。
- (14) 『人民日报』二〇〇〇年四月四日。
- (15) 別の資料によれば、劉意青は北京大学の教師だとある。
- (16) 坂元ひろ子「足のデイスコース―纏足・天足・国恥」(『思想』二〇〇〇年一月)
- (17) 坂元前掲論文、および坂元「中国民族主義の神話―進化論・人種観・博覧会事件」『中国―社会と文化』一三三号。
- (18) この表紙デザインもなかなか興味深い。若いアジア系の女性が孔雀の羽をかたどったような赤いブランケットをかけて横たわっている姿だが、よく見るとそのブランケットは五星紅旗であり、孔雀の羽の模様に見えるのは大小さまざまな毛沢東バッジである。
- (19) 配属された病院の医師七〇名の内、医学校卒業は孔林を含めて四人しかいなかったという設定である。この作品で主人公がインテリであることの重要性を黄燦然「ハ・ジンの解放」『今天』二〇〇〇年三期、は指摘している。黄によれば、孔林は中国のインテリの善良さと臆病さを象徴する。曼娜は(現代の)中国を、淑玉は純朴で奴隸的な中国を象徴する。また、作中唯一の悪人とも言える林の友人、楊庚は除隊間際に処女の曼娜を強姦する。楊は改革開放路線に乗って成金に

なり、中国を蹂躪する外力を象徴する。機械的な図式に見えるが、かなりの確と思われる。

- (20) 『ニューヨーク・タイムズ』一九九九年十月二四日。
- (21) 『シカゴ・トリビューン』二〇〇〇年一月一〇日。
- (22) 『シアトル・タイムズ』一九九九年十月三一日。
- (23) 「死亡との賭け」。
- (24) 『シカゴ・トリビューン』一九九九年十月三一日。
- (25) 史書美「グローバル化とマイノリティ化」『現代思想』二〇〇一年三月。
- (26) 徐淑卿「ハ・ジンは祖国に背く選択をした」『時報』二〇〇〇年八月三一日。
- (27) フィーリー、前掲論文。
- (28) 二〇〇〇年一月四日に著者をゲストに Barnes & Noble というオンライン書店が行ったチャット会での発言。<http://www.barnesandnoble.com>
- (29) 黄燦然、前掲論文。